

踐たなびく

野にやまに

朽ちせぬ花

つねを

善の報いに

名もなくて

世にまつろはぬ

すね人に

ふもはぬ幸の

花さきて

譽れの實のる

ためしあり

よしや生れし

人のよの

譏りありとも

まごころの

よきとあしきは

幾千代に

朽ちせぬはなと

にははまし

海

竹柏會同人

伊藤梅子

わたつみの千ひろの底にかつき入りて

世のなりはひとあはびとるなり

樺山常子

かぎりなき青海原をとぶ鳥の

翅やすむる帆ばしらの上

服部しげ子

久方のあめのぬぼこのしたたりや

大海原のはじめなりけん

佐藤朝恵子

櫻島とほくかすみて真帆かた帆

かぞへもあへぬ浪のうへかな

宮本より江

智の鍵に探るとすれど極みなさ

海のみ神のみ幸をぞ思ふ

大竹伊勢子

のぞみおほき人のこゝろはうなげらの

はてなきよりもはてなかりけり

堀 孝子

はらへともうき世のちりによむれては

硯のうみのかわきがちなる

淺井 護

わたつみの神いかりますかあなかしこ

七日なゝ夜をたゝわれにある

中村 ふみ子

越の海おきつしはかせ吹きあれて

そらよりふつるわら浪の聲

關 屋 愛子

一人子の舟出なしつる其夜より

夜毎ゆめみるわら海のおも

山 本 芳子

鷗うめあそびなみ静なる春の海

われも小舟を浮べ遊はん

有 賀 晴子

白かねのま玉となりて糸となりて

はまのまご路波よせかへる

久保 花子

わたつみの底のこゝろはしらねども

長閑にみゆる春の海かな

金井 繁子

龍神のいかりおそれし海原も

ゆきゝひまなき世となりけり

西 方 鐵子

別れにし舟はほどなく見えわかず

霞にこもる沖つしらなみ

清 水 錦子

青だゝみしけるがごとき海原に

あそぶがごとく見ゆる舟かな

長谷部 和子

のぞみあるますらたけをしずめけん

うみとも見えすかすむ春かな

松 井 友子

鳥がくれ又しまがくれゆく舟の

いつ着くらんか知らぬみなとに

佐々木 雪子

磯づたひ日毎あゆめば幼子も

波をおそれずなりにける哉

佐々木信綱

いとせめて波にむかひて語らばむ

人に語らむおもひならねば

外國にある友に 東 条 子

ありし世をしのぶが岡にきて見れば

きみとながめしはな咲きにけり

折にふれて 全 人

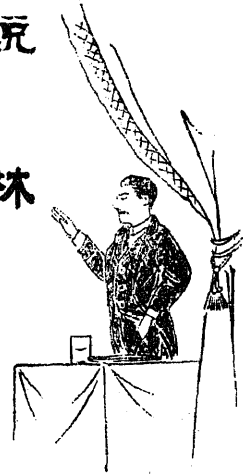
月に泣き花にうかる、みやひをの

あまりさはなる世にもあるかな



説 林

保育法の改良



吾人は屢「六ヶ敷つても説明すれば子供に分ります」との言譯によりて、如何にも三才乃至五六才の幼兒に取りて、不適當なる程六ヶ敷きことを幼稚園に於て授くるを見るなり。唱歌に於て然り談話に於て然り。手技に於て然り、而して最も幼兒の生命とすべき遊戯に於て亦然らざるなし「説明すれば分る」なる程子供とても、説明すれば分るべし。然れども、大人の説明によりて